

.....
デンマスター黒主のこと

ハンザキ研へ国道 429 号から渡るハンザキ橋の下流側にあるアンコ淵のハンザキの優良な繁殖巣穴のデンマスターをここ 6 年間保持している黒主(No.977)はすっかり有名になって、訪ねてくる人たちから黒主君は元気になっていますか?と問いかけられることが多い。常時、橋の上から観察を続けているわけではないので、なかなかその姿を確認する機会は少ない。それでも、食事時にはモニターを時々眺めながらビールを“食”していると顔を見せてくれることがある。昨年の 9 月 14 日に繁殖パーティがあつてから、10 月 13 日に卵の一部をフッキングした後、10 月 15 日を最後にその姿を確認できていなかった。ところが、岡田副理事長が主調査域としている簾野地区の今年の 5 月調査で測定していたことが分かった。データが岡田さんから先日送られてきて判明したのである。



モニターに現れた黒主

今月 11 日のボランティア作業で、アンコ淵のクリーニングを実施してもらった。潜水作業をしてくれたスタッフの山崎寛子さんは「穴は埋まっていなかった」とのことだったが、かなりのヘドロが出ました。一日の作業で疲れたので、ひと眠りして 21 時頃に起きだし、パソコンのモニターをオンしました。しばらくの間ビールを飲みつつモニターを眺めていると突然、画面に黒主が登場したのです。2ヶ月前下流の簾野で測定されてから3か月半のことです。驚いて画面をズームさせて腰部の2つホクロと尾の右側の大黒斑を確認しました。黒主はどこかで繁殖巣穴をクリーニングしてくれるのを見物していたのではないかと思われるような出来事だった。早速、山崎さんに夜中にもかかわらず「本日はご苦労さまでした。嘘みたいな素晴らしい話をお伝えします」とメールしたところ「なんと!!!」と言

う返事がすぐに届きました。昼間の疲れが吹き飛んでしまうような出来事でした。黒主が穴から出て 30 分ほど散歩をしたあと、巣穴に入るや猛烈な土煙が出てきました。まだ人間のクリーニングでは不満足だったのでしょうか。例年 9 月の 10~15 日頃に産卵が確認できているので、再び今年もデンマスターを務めるべく復帰してきたものと思います。

黒主は、ハンザキ研から 500 ㍓ほど上流で市川に合流する支流の長野川において 2004 年 7 月に登録されてから、2006 年にアンコ淵の主に収まって以後、毎年繁殖パーティの主役を担っています。最初の測定では全長 1000 ㍓、7.30 ㍓ですが、アンコ淵に落ち着いてからは年 1 回測定することにしてはいますが 990 ㍓のままです。体重の方は 5 ㍓までダイエットしてきています。これは毎年の繁殖活動にエネルギーを費やし過ぎて成長できないのではないかと考えているところです。もっとも、潜水して穴の出入り口を見ていると黒主の頭部がやっと通過できる程度の狭い隙間なので、これ以上成長すると井伏鱒二の山椒魚のように巣穴から出られなくなるか入れなくなるかもしれません。現在でも入る時にはもがいており必死に尾を左右に振ってやっと潜り込むような有様なのです。

ところで、ハンザキの雌雄は外見上では差がありません。わずかに、繁殖期を中心にオスのお尻の穴（クロアカ）のまわりが小さなドーナッツを付けたかのように膨らんでくることが知られています。ピーク時にはクロアカの状態を確認するために引っくり返したりすると起き上がろうと力んで精液を出すことがあり、そのような個体のクロアカ周辺はパンパンに膨らんでいるのです。ところが、昨年 8 月 19 日の確認ではふくらみが見当たらなかったのです(写真 4)。そして、今年もまた 9 月 11 日の昼間（産卵受精が行われたのは当日の夜間）のチェックでも同様だったことです。繁殖行動の中心にいるオスに性的な活性化が見られない？とはどう言うことなのでしょう。この 2 シーズン共に巣穴内の卵は受精されており（無論スニーカー・オスの存在もありますから）孵化も順調であった。黒主の遺伝子は子孫に伝わったのだろうか心配になってくる。

体重の減少も心配の種であり、上から見ると明らかにピン・ヘッド(頭は骨があるので細くならないが、腹部が細くなり尾高も小さくなって蓄えられていたエネルギー源の脂肪層が減少している(写真 2・3)。繁殖期には繁殖巣穴をクリーニングしたり、周辺に集まってくる多くのオスたちを昼夜にかかわらず度々パトロールしては攻撃することを続けている。これはかなりの体力を消耗する行動だと考えられる。毎年一回の測定で、今年こそは 1 ㍓伸びて 1 ㍓になっているかどうかと楽しみにしているのだが、目下 9 年間成長が見られない。最初の全長 1 ㍓という値は誤差の内であり、全く変化が無いということである。体重は当初からの 32%程もの減少がみられる。

“黒主”というネーミングは橋の上から見ている時に頭部の傷跡が広く黒色になっていた(写真 1)からであるが、時間と共に薄くなっていく。そこで“黒川村の主”で黒主と言うことにした。ハンザキ研の主でもあり順調に成長してほしい半面、大きくなって巣穴に入れなくなると新居を求めて移動してしまうかもしれない。私としては複雑な心境であるが、やはり大きくなってほしいものだ。

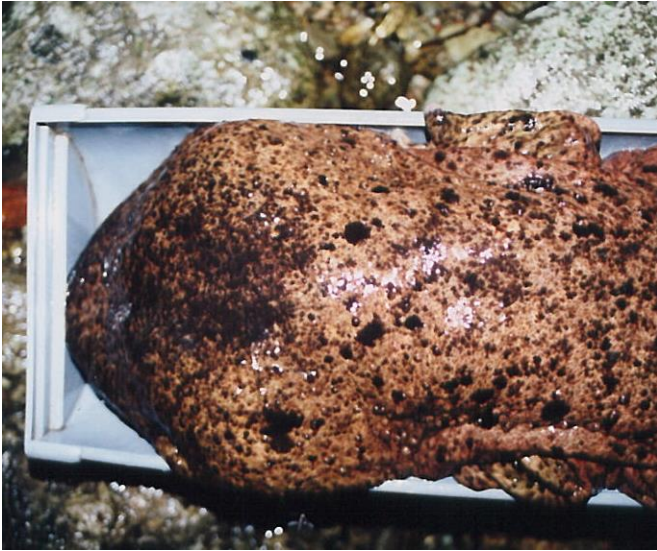


写真 1 黒主の頭部 (2004 年)



写真 2 黒主の尾部左側面の斑紋 (2004 年)



写真 3 黒主の尾部左側面の斑紋 (2012 年)



写真 4 黒主のクロアカ (2012 年 8 月)



写真 5 ツリフネソウの大株出現



写真 6 ツリフネソウのはじけた種子の鞘



写真7 オオゴマダラエダシャクの幼虫



写真8 オオゴマダラエダシャク幼虫頭部



写真9 シマヘビ



写真10 ジャンボ・ハイブリッド用特製ネット



写真11 アンコ淵のクリーニング作業



写真12 ダブル・リング内に謎の白い泡

ジャンボ・ハイブリッド・ハンザキ専用の特製ネット

全長 130 ㌢、体重 16 ㌔と言うサイズで 3 年前に京都賀茂川から搬入されたジャンボが 2 個体いる。特別天然記念物のハンザキを一時的な展示のために移動させることは文化庁長官の許可が出ない。そこで、ハイブリッドの“カモガワ・ハンザキ”（私が和名を付けました）の出番である。それもジャンボサイズの迫力ある姿をできるだけ多くの方々に間近に見てもらいたいと考えてのことです。環境フェスタとか生野高校の開校 100 周年記念祝賀会、生野町最大の祭りである“銀谷（かなや）まつり”などでは 160 センチの大きな水槽を持参して出演してもらうことにしている。

ところが、このハイブリッド君は猛烈に気が荒いのです。プールから取り上げるのにも大変な騒ぎになります。網に咬みついて体を回転させたり、体中からあの粘っこい強い臭いの白い粘液を大量に分泌するのです。捕獲用の網もギタギタになるし、こちらの手も軍手がズルズルになって力が入りません。何とか取り上げて輸送して現場で水槽に水を入れるのですが、ホースからの水にまで咬みついてくるというありさまです。こんなに手を焼かせるハイブリッドなのでしばらく測定をしていませんでしたが、いつまでも最初のサイズを言っているのも看板に偽りがあると“偽装”問題になりそうですので、測定を試みました。雨どいを改造した全長測定器には入りませんので、木材で作った特別の測定器を準備しました。しかし、暴れまわってなかなか落ち着いて測定させてくれないのです。

そこで、新兵器を考えてみたのが専用の捕獲網と体の保定用にも使える“我が特許物”の布袋です。ハンザキの調査で考え出したものは木綿袋にファスナーを付けた物でした。布は濡らしておくとお中に入ったハンザキの体に張り付きます。猿轡のような効果もあって咬みつかれることが無くなり、諦めておとなしくなるので全長測定も誤差が少なくなりました。ファスナーはハンザキの左肩にマイクロチップを打ち込むために開けることができるようにしたのです。

布だけの袋では、カモガワ・ハンザキのジャンボの暴れ方を見ていると心細いので、外側を丈夫なネットでカバーしました。袋の奥は紐で巾着のように絞っておき、ロープも付けました。袋の入り口は網枠を付けて、塩ビのパイプの柄をねじ込めるようにして、こちらから紐を絞ると中に入ったハンザキを閉じ込めることができます。網枠と袋尻のロープで動物の体ができるだけ真っすぐになるようにして、水中からすくい上げるのです。体が曲がったまま陸上に引っ張り上げると、内臓や背骨に損傷を与えることがあるからです。これも水族館時代の失敗経験があつてのことなのです。(写真 10)

さて、この特製のネットを使ってジャンボの測定を試みました。全長 138 ㌢、体重 18.5 ㌔と 134 ㌢ 22.6 ㌔でした。しかし、測定後に元のプールへ戻した後が大変だったのです。3×5 ㌢、水深 60 ㌢に 2 匹だけ入れているのですが、気に食わねえとばかりお互いに咬み付き合つて暴れまわり水面に大波が、挙句の果てに双方とも全身に白い咬み傷と共に、一方の個体は、左前肢の指のほとんどを失ってしまったのです。まったく困った奴なのです。

ハンザキ研の生き物

ツリフネソウ

当ニュース 82 にツリフネソウのことを書いた。シカの食害を受けて当地では絶滅状況にあるが、藪の中にかろうじて残っていたいじけた株を昨年見つけて構内に移植した話である。うまく種ができればいいがと思っていた。今年、湿地ビオトープに大きな草むらができていたが、花が咲くまで気づかなかった。なんとこれがツリフネソウの大株だったので。昨年移植した時は草丈が 10~15 ㍎の小さな株で葉っぱも藪陰にあったためか僅かしかついていなかったみじめな姿だったので、その差の違いに驚かされました(写真 5)。直径が 1 ㍎ほど高さも 50 ㍎くらいの株です。無数の“釣り舟”型の花が咲きました。種子はハウセンカのように熟すると鞘がはじけてたくさんの種が飛び散ります(写真 6)。来年は大群落が出現するものと思うと、復活！！ということで楽しみです。

オオゴマダラエダシャク

カキの枝を剪定していた時に、頭の上に何かが落ちてきました。払い落とすとそれは枯れ木のように見えたのですが、目玉が付いています。突然のことで硬直したイモムシだったのでつまんでみると、いきなり反り返ってまるでコブラが咬みついてくるような勢いでアタックされたので思わず放してしまいました。枯れ木のまねをしていて油断させる作戦なのでしょう。何者か！ということでイモムシ図鑑を開くと、特徴のあるこのガの幼虫(写真 7)はすぐに分りました。しかし、頭部のアップ写真 8 を眺めると愛嬌のあるような凄味のあるような何とも言えない表情ではありませんか。体の黒い筋模様などは誰かがいたずら書きしたのではないかと思えるようなデザインで、自然界の生き物というのは本当に不思議な造形を見せてくれるものです。

シマヘビ

ヘビは苦手だ。校庭に湿地ビオトープを作ったのでカエルがたくさん殖えた。私の歩く先でトノサマガエルが草むらから水中に飛び込んでいく。“トノ”は陸生のカエルなのでねと言われるが、大体カエル類は陸上で餌を取っています。大型の外来種ウシガエルは、その体の大きさからかハンザキ同様にもっぱら水中生活をしているようです。ですから、圃場整備で畔が少なくなるということは、“トノ”にとっては困ったことなのです。校庭は種々の植物を茂らせていますので、昆虫類の天国でありカエル類の天国になっています。これを狙ってシマヘビが集まるという食物連鎖を露わに示しています。気の荒いシマヘビも我が孫に蹴飛ばされて驚いたことと思いますが、咬まれた孫も初めての経験をしました。

謎の白い泡の出現

ハンザキ保護プールの水面に洗剤で作られたような白い泡が目立つようになりました。プールの水質が悪いのかと気になっていたのですが、河川内でも同様の現象が確認されました。アンコ淵のゴミ除け兼波消しのための自慢のダブル・リングですが、この内側でモヤがかかったような曇りガラスのように見えにくい状況に気が付いたのです。よく観察すると小さな泡が無数に浮いて水面を覆っていたのです。上流で誰かが大量の洗剤を流したのではないかと勘ぐっていたのですが、どうも季節的な現象のようです。

水質調査をしてもらおうと相談したのですが、一般の環境アセスのように検査対象が分っている場合は簡単なのですが、何が含まれているのかを検査するにはかなりの金額が必要であり、その結果も原因物質が判明できるかどうか分らないと言うことでした。季節的なことであるとすれば、ある植物の開花時期に花粉とか何かが原因になるのかなと思います。誰かこの謎を解明して下さい。(写真 12)

ヤナギタデ

刺身のつまになっている紫色のベビーリーフ?のことです。タデ食う虫も好き好きと言われるように、少々ニガ・カライ植物です。私は飲兵衛を自称していますが、辛いもの、ニガ旨いものなどやワサビ、カラシ、唐辛子、ペッパー、山椒などなどに目がありません。スーパーの野菜売り場を覗きながら何かないかと鶺鴒の目鷹の目でうろつきまわります。ベニタデという商品名で売られているのがヤナギタデの芽生えです。よく見ると根が付いている物も結構あるので、これを校庭の花壇に植えてみました。小さな桜色の花がついて来年は種子が落ちて自生してくれることを期待しているところです。

イシガメの卵

前にも紹介したが、川から 5 ㍍前後もの高さにある校庭まで親ガメは上って来て産卵します。以前に見つけたのは花壇に開いていた穴の底に残された 1 卵でした。今回は、校庭の駐車場に敷き詰めるために運ばれてきたバラスの山の中腹に開いていた穴でした。やはり 1 卵が残されていたのですが、卵がはち切れそうな良い状態ではなかったので解剖してみると、かなり発生が進んでいるイシガメの胚の死んでいる物が出てきました。親ガメは産卵後、丁寧に埋め戻して卵を隠して去ります。穴が開いていたということは同腹の仲間が孵出した後かもしれないかもしれませんが、ふつうは孵化してもすぐに地上に出てこないもので、腹からたちと一斉に地上に出てきます。残された卵の発生状況からは、まだ孵化には至っていない時期です。穴をあけたのは、へびだろうと考えていますが、どうして 1 卵だけ残してしまったのでしょうか。食える時に食えるだけ食うのが肉食動物の常ではないだろうか。

ハンザキ研日誌

2013年8月

- 2日 大阪から孫がやって来て、シマヘビを蹴飛ばして咬みつかれる騒動あり
- 5日 T. ジョンソン会員が愛息アラン君を連れて独人のジャーナリストと来所
- 6日 キノコ定期定点調査 (横山先生他 4名)
- 9日 台湾の大学生 You Chungwei 君(2回目)他 5名来所
- 11日 ・ボランティア作業 17名参加
・黒主がアニコ淵に復帰
- 13日 ラジオ関西に電話出演(NPO 法人日本ハンザキ研究所の話)
- 17日 上水用ポンプ不調
- 18日 公開見学会 24名参加、スタッフ 7名、毎日新聞取材
- 21日 田口理事、母校の後輩大阪府立大学生 20名と調査及びボランティア(23日まで)
- 23日 奥藤事務局長と資材調達にホームセンターへ
- 24日 ・事務局会議 8名
・兵庫県中播磨県民局 22名見学に
・岡田副理事長他 4名で夜間調査、7個体測定、1個体は新規
・ハンザキの夜間観察会は降雨で増水のため中止
- 30日 兵庫県高齢者大学みてやま学園で講演(豊岡にて)

.....
ハンザキ所長のツブヤ記録

小学校3年生になった孫娘は元気者である。やって来てすぐに4年の次兄と校庭を走り回って遊んでいた。後ろから走ってついて行っていた兄が「妹がシマヘビに咬まれた」と言ってきた。急いで駆け付けると足の甲に牙の跡、出血していた。本当にシマヘビなのかどうか心配したが、まだ近くにいたヘビを兄が網で捕まえたので一安心した。何しろここは自然豊かな環境で、本州に生息しているヘビ8種すべてが確認できているのだ。シマヘビの他に毒蛇のマムシ、ヤマカガシそしてアオダイショウ、ジムグリ、ヒバカリそして希少種のタカチホヘビとシロマダラである。校庭でマムシのロードキル標本を拾ったりマムシ酒を製作中だったりしているので、毒蛇ではと心配したのだがヤレヤレという事件だった。足元や草むらに注意して歩けと言っても、大人でさえ他のことに気を取られているとなかなかそうはいかないものだが・・・

これまでも、見学に来た小学生やボランティアの高校生がスズメバチにやられている。私も伐採木ビオトープの整形中に木株の陰に巣くっていたキイロスズメバチに頭頂部をやられた。全く、刺されたというよりも咬みつかれたかのような鋭い痛みであり、とっさに平手で頭をピシャリとやって仇打ちにはしたが、後続のハチが出てこなかったのが幸이었다。なにしろ、自然が豊かということは危険生物も多いということである。ヤマビルを始めとしてウシアブやコナダニにも時々やられているが油断できない環境なのである。